

ゼミ紹介 - 福元ゼミ -

心理学科3年 瀧山陸(たきやま りく) 知立高校

現在福元ゼミには、3年生10名が在籍しています。福元先生は、臨床心理学および発達障害児支援を専門としており、私たちゼミ生のおしゃべりにも、とても突っ込んでくれる気さくな先生です。また、一人一人に寄り添って話を聞いてくれます。私たちゼミメンバーの特徴は、基本的に全員明るく元気いっぱいです。全員が仲良くしゃべることができます。そのため、現状で研究の軸が決まっていなくても、楽しく充実したゼミ生活を送ることができています。私たちのゼミでは、前期後期を通じて、個人の発表とグループでのポスター発表を行いました。個人発表では、興味のある先行研究を理解することから始まり、その内容についての発表を行いました。グループ発表では、2〜3名のグループを作り、それぞれが気になるテーマで調査を行い、その結果をまとめました。発表

時間が20分から30分あるので、大変ではありましたが、達成感があり自信がついたと感じました。ゼミ生が協力的なので、発表が苦手な方もよい経験を積むことができます。また、ゼミのメンバーでお互いに意見交流をする時間もあるので、話すのに自信がない人や向上心がある人も全員楽しく参加することができます。4年からは、本格的に卒論の準備が始まります。ゼミメンバーと助け合いながら頑張りたいです。

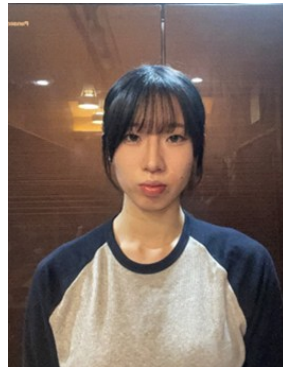


実習体験記 - 心理実習 I -

心理学科2年 嶋田颯(しまだ いこい) 高岡工芸高校

心理実習 I では、医療・保健、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の5つの現場で見学実習をさせていただきました。講義やグループワークに加え、実際の支援の場を見学することで、大学の講義だけでは得られない、心理職の具体的な役割や関わり方を学ぶことができました。見学実習では、利用者の方との距離の取り方や言葉の選び方、支援を行う際の配慮など、心理職としての姿勢が細かな部分に表れていることを実感しました。また、守秘義務や倫理が現場でどのように守られているのかを自分の目で確認できたことは、自分にとって大きな学びとなりました。授業内の振り返りでは、見学実習で感じたことや疑問についてグループで話し合い、他の学生の意見を聞くことで、自分一人では気づけなかった考え方に気付くことができました。グループワークを通して、気づ

かないうちに自分の価値観や思い込みが他者理解に影響していることを改めて実感し、人と関わる際には多様な視点を意識することが大切だと考えるようになりました。心理実習 I を通して、心理職には知識や技術だけでなく、自分自身を振り返り続ける姿勢が重要であると感じました。心理職を目指す上だけでなく、今後の生活や人間関係において、自分の価値観が広がり、自分にとって大きな経験になったと思います。3年次の心理実習IIでもこの学びを活かしていきたいです。



教員紹介 - 心理学科 -

奥村哲朗先生

皆さんこんにちは。2025年10月に赴任してきました、心理学科助教の奥村哲朗です。私は臨床心理士、公認心理師として、主に精神病院や産業分野(働く人のメンタルヘルス)の現場にて、職場のメンタルヘルス対策や、うつ病などによる休職者の職場復帰支援に取り組んできました。メンタルヘルス疾患による休職と聞くと、ネガティブなイメージがあるかもしれませんが、数ヶ月からときに数年におよぶ休職の間に、自分の働き方や生き方を見つめ直し、何を大切にしたいのか、どのように生きていけば良いのか、本当の自分自身になるプロセスを歩んでいく方々と多くお会いしてきました。自身の納得できる生き方を共に見つめ、考えていく作業は、私自身の成長にもつながったと感じています。また、現在はがん治療と仕事の両立や、若年がん経験者の就活困難などのテーマで研究を行なっています。病とともに生きる人の葛藤

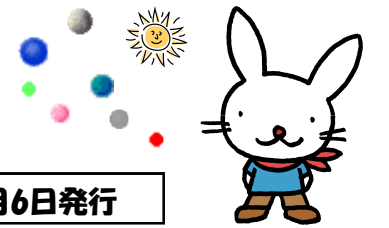
や困難だけでなく、病の経験から得た人生の智慧を含めて、当事者の経験を描き出せるような研究を目指して、インタビュー調査を行なっています。最後に、趣味はジャズベースを演奏することです。また、黒猫を3匹飼っています。これから皆さんと共に、心の理解をより深めていけることを楽しみにしています。どうぞよろしくお願ひいたします。



日本福祉大学

教育・心理学部ニュースレター

第27号 2026年3月6日発行



この号の主な内容

・学部長紹介	・実習体験記 -特別支援学校-	
・心理学科(学生部長)紹介	1 実習体験記 -中学校-	3
	・学生会長の思い出	
	・中国との授業交流	
・ゼミ活動紹介 -子ども発達学科 江村ゼミ-	・ゼミ紹介 -福元ゼミ-	
・実習体験記 -保育実習-	2 実習体験記 -心理実習 I -	4
・スウェーデンでの「インクルーシブ保育研修」紹介	・教員紹介 -心理学科-	

教育・心理学部長 江村和彦



教育・心理学部は、こども学科、学校教育学科、心理学科の3学科で成り立っています。学部には本当に多彩な先生たちが教育、研究に携わっており、私たち教員同士でもお互いの研究について詳しく知っているわけではありません。みなさんが授業で講義をしている時の先生と自分の研究している時の先生は違う顔をしているかも知れませんね。そんな先生たちの研究の一端を知ることができる冊子があるのをご存じでしょうか。それは、「大学での探究〜『問いからはじまるあなたの学び』」です。見開き1ページの短い文章の中に、保育、教育、心理の領域にとどまらない先生たちの研究に対する思いや学生たちと考えてみ

たい世界の捉え方などが詰まっています。学生のみなさんも、この冊子をきっかけに学科を超えていろんな先生と話をしたり、友人とテーマについて議論したりして大学生生活を実りあるものにしていってください。

心理学科(学生部長) 小平英志



新型コロナウイルスが5類感染症に変更されてから、3年弱になります。活動の自粛により、一度途切れてしまった学生活動(サークル活動など)ですが、ここ最近新しい活気が芽吹いてきたのを感じています。特に教育・心理学部のある美浜キャンパスでは、サークルの代表が集まる「サークル協議会」が復活し、社会福祉学部の東海キャンパス移転に向けて活発な議論をしています。また大学祭は、これも学生の組織である「大学祭実行委員会」の仕切りによって、ここ数年は2千人超の来場者を迎える大盛況のイベントとなりました。さらに学生の代表である学生会は、念願のスポーツ科学部の合流を果たし、新たなスタートを切りました。学生会は本年度も、学部間の交流企画(写真は「旅企画」の様子です)や、キャリア支援企画、学生の声の集約等を行ってきており、他キャンパスの学生活動のモデルにもなってくれています。ちなみに現在の学生会の会長は、教育・心理学部 学校教育学科の丹羽さんですし、各団体にも本学部の学生がたくさん参加しています。今後も学生たちが自らのパワーで、美浜キャンパスをますます魅力的な場所にしていくことを期待しています。

ゼミ活動紹介 – 子ども発達学科 江村ゼミ –

子ども発達学科 保育・幼児教育専修3年
佐野友香(さの ゆうか) 東海大学付属静岡翔洋

江村ゼミは、造形を専門とする江村先生のもと、楽しみながら学ぶことを大切にしているゼミです。ゼミ活動では、保育所や児童発達支援センターを訪問し、子どもたちと一緒に造形活動などを行っています。実際に子どもと関わる中で、子どもの自由な発想や表現の面白さに触れ、毎回新しい気づきや学びがあります。また、ゼミでは「何を作りたいか」「どんな活動してみたいか」を自分たちで話し合いながら決め、ものづくりに取り組んでいます。素材に触れたり、試しながら作ったりと、手を動かしながら自由に表現できるのは江村ゼミならではの魅力です！決まった答えがないからこそ、一人ひとりのアイデアや個性が大切にされています。ゼミの雰囲気は明るく、同級生や先輩方との交流も活発です。学年を越えて楽しく話し合ったりしながら活動を進めています。造形を通して子どもと関わる楽しさや、表現することの面白さを実感できるゼミです。

実習体験記 – 保育実習 –

子ども発達学科 保育・幼児教育専修3年
若林陸(わかばやし りく) 春日井西高校

私は今回の保育実習を経験して、子どもに対するイメージが大きく変化しました。私が実習に参加させてもらったクラスは四歳児クラスで、実習開始前に四歳児クラスで二週間の保育実習を行うと知ったとき、不安で押しつぶされるような心情でした。四歳児は自我も発達していて、自分の「やりたい」という思いに敏感な時期であり、各々の意思がぶつかり合う時期でもあります。大人の言うことなど意に介さず自分の興味の向く方へ突き進んでいき、私たちを置いて行ってしまう、そんな印象を持っていました。実習前は、子どもたちとまともなコミュニケーションも取れないのではないか、そんな不安な気持ちで頭がいっぱいでした。そんな状態で迎えた実習初日に、子どもたちは私の不安をかき消してくれました。そこで出会った子どもたちは、自分の中に強い意志を持ちつつも、相手の話を聞き、自分たちで考え、そして相手を尊重することができる、そんな子どもたちでした。初対面の私の話であっても、まず相手の話を聞こうとする姿勢を示してくれました。なぜこんなにも相手を尊重できるのか、その答えは、担任の先生と過ごす日常の中にありました。私が参加したクラスでは、「お話タイム」という時間が設けられており、その時間では、先生と子どもたちが環になって座り、今後どんなことをしたいかを話し合っていました。その中で、子どもたちは挙手をして、一人ひとり自分のしたいことを目を輝かせながら話していきます。先生は、子どもたち全員が自分の話をできるように、名前を呼びながら一人ひとり話す機会を保障し、子どもの意見を否定せず、共感し、「こういうことかな？」と代弁も織り交ぜながら話を聞いていました。人前で話すのが苦手な子に対しても、「ゆっくりでいいよ」と落ち着くことのできる配慮を忘れず、子どもたちも他の子が話すときは自分の発言を止め、相手の話を静かに聞いていました。自分の発言が否定されず、自分の意思が尊重され、形になる実感が、子どもたちの相手を思いやる優しさに繋がっているのだと感じました。私が保育者になったときも、「お話タイム」を実践してみたいなと強く感じた二週間でした。

スウェーデンでの「インクルーシブ保育研修」紹介

子ども発達学科 保育・幼児教育専修3年
山田幸志郎(やまだ こうしろう) 羽水高校

2025年8月、私たち松山ゼミはスウェーデンでの「インクルーシブ保育研修」に参加した。事前研修では、言葉や文化が異なる環境でいかに子どもと向き合うかを検討し、万全の準備で臨んだ。現地では様々な施設を訪問した。まずKAC(クリエイティブ・リユース・センター)では、子どもの「Why」に耳を傾け好奇心を尊重することが、子ども自身を「共生社会の一員」として自覚させる一歩になると学んだ。4箇所の保育所では、折り鶴やハンカチ落としを通じて交流した。言葉が通じずとも、ジェスチャーや簡単な英語を用い、私たち自身が心から楽しむ姿勢を見せることで、遊びの過程を共有できることを実感した。インターナショナルスクールでは授業見学と交流を行い、平仮名で自分の名前を書く子どもたちの姿に、異文化への純粋な関心と喜びを感じた。最後に、ウプサラ大学の赤ちゃんラボを訪問した。大学院生の研究発表を聴講し、子どもの視線を分析する映像機器など、最新の保育研究に触れた。ラボ内には子どもが動揺しないよう、絵本やブロックを備えた遊び場が併設されており、環境構成の重要性を再認識した。今回の研修を通じ、多様な子どもと関わるための視点や、インクルーシブな環境の在り方を深く学んだ。一人ひとりの個性や主体性を尊重し、それを支える環境をいかに整えるべきか。この貴重な学びを、今後の学生生活や将来の保育実践に最大限に活かしていきたい。



実習体験記 – 特別支援学校 –

子ども発達学科 学校教育専修4年
中平夕美虹(なかひら ゆみえ) 尾鷲高校

2週間の教育実習を通して、特別支援教育に携わる教員に必要なことは「児童・生徒への深い理解」であると感じました。なぜなら、その理解こそが児童・生徒の発達に影響すると考えたからです。授業や休み時間、給食の時間などの1日のさまざまな場面で実習校の先生方から余裕を感じました。その余裕は、日ごろから児童のことをよく観察・理解し、児童の連絡帳を通して些細なことや教育方針等をお互いに伝え合う保護者とのかかわりからくるものだと感じました。それぞれの児童が抱える個別の課題を小学部の教員同士で共有し合い、授業での支援や教育の方法を考えて、実践しているのを見て「理解する」ことの大切さを改めて感じました。今回の教育実習では、以上のことを含めて、実際に現場の先生方から直接教えていただいたことや自分が授業の観察・参加により見て学んだことが多くあります。これらの学んだことを来年4月から教員として子どもの前に立って教育をするようになった時に、その時目の前にいるそれぞれの子どもに合った方法で実践していきたいです。



学生会長の思い出

子ども発達学科 学校教育専修4年
西川颯(にしかわ はやて) 日本福祉大学付属高校

私は、2年生から4年生までの3年間、学生自治会・学生会という組織に所属していました。2年生の1月から4年生の7月までは会長として、抽選企画やゲスト企画などの運営を行いました。私にとって学生会はとてもかけがえのない組織です。2年生の頃は、学生会の知名度が低く、何をしているのかわからない組織でした。今では学生会の定番企画となった、抽選企画やゲスト企画などを、皆さんが目に見える形で実施していくことによって、だんだんと学生会の知名度が上がっていき、我々の活動の幅も広がっていきました。企画を実施するにあたって、学生会の仲間とたくさん話し合いを重ね、夜遅くまで残ることもよくありました。それでも、みなさんに楽しんでいただける企画を提供するために、たくさん話し合いました。時には仲間とぶつかることや問題に直面することもありましたが、話し合いを重ねたり、過去の企画の反省点を活かしたりすることで、問題を解決していききました。そんな学生会で過ごした日々は、私の人生の1ページに刻まれるほどの良い思い出です！！



実習体験記 – 中学校 –

子ども発達学科 学校教育専修4年
服部飛馬(はっとり ひゅうま) 多治見工業高校

小学校と中学校では、子どもの発達段階が異なり、授業の進め方や子どもとの接し方においても意識すべき点が違うと感じました。中学校では一つの教科を専門的に教えることとなります。そのため、担当教科の知識をより深く持つ必要があります。また、中学生は時に予想外の視点から質問してくることがあり、それに対応するには、教員自身が学び続ける姿勢を持つことが大切だと実感しました。教育実習では、中学1年生の社会科・地理的分野の「ギリシャ・ローマ文明」の単元を担当しました。しかし、実習前の私は教科書レベルの知識しか持っておらず、「なぜギリシャは長続きせず、ローマは長く続いたのか」といった疑問に明確に答えることができませんでした。そこで、図書館で関連書籍を読み、自ら学び直すことでその単元に関する理解を深める努力をしました。こうした経験から、教員にとって日々学び続ける姿勢がいかに重要かを学びました。来年から実際に教壇に立つこととなりますが、今の私にはまだその姿が明確に想像できません。それでも、子どもたちにとって一度きりの貴重な学校生活をしっかり支えられる存在になりたいと思っています。そして、教員になることがゴールではなく新たなスタートと捉え、頑張っていきたいです。



中国との授業交流

齋藤一晴先生

皆さんにとって中国はどのような存在でしょうか。かつて日本は中国と戦争をしました。これまで受けてきた授業では、戦争の原因や経過などは習ったかもしれませんが、戦後に残された課題や関係修復のための対話、共生への取り組みなどについては学んでこなかったかもしれません。私は、10年にわたって南京の高校と授業交流を行ってきました。中国の歴史の授業を見学して、日本側も中国の高校生を相手に授業を行うというものです。テーマは、日中戦争や日中交流、日中関係史などが中心です。これまでゼミ生と一緒に参加したこともあります。中国の高校生のリアルな発言、日本や日本人に対する印象や認識などを知ることができました。まさに百聞は一見に如かず、です。先入観にとらわれることなく目の前の生徒たちと対話することで、自分自身の歴史認識や中国観が問われていることに気がつきました。こうした経験は、対話や共生に役立てることができると思います。皆さんも、ぜひ一緒に中国に行ってみませんか。

